

テキストを採り、生かす

山田敦士

やまだ あつし/日本学術振興会特別研究員(北海道大学)、AA研共同研究員

未知の言語と向き合い、虚心坦懐に書きとめる。それは同時に、話者の母語に寄せる愛着を知り、その言語文化の置かれた社会的状況を知ることでもある。何を「採り」、どう「生かす」か。それが問われている。



村の風景。2005年頃を境に、茅葺の屋根はすっかり姿を消した。

20世紀初頭に伝来したキリスト教。聖書・讃美歌はもちろん、礼拝時の祈りの言葉なども重要なテキストとなる。



フィールドの風景

「ヴー、ガウガウ！」

小型バスを乗り継ぎ、途中下車して歩くこと1時間。大きなバックバックを背に、汗と砂埃にまみれた私を真っ先に迎えるのは、これまた砂埃にまみれたルワである。私は無類の犬好きだが、ルワはどうも苦手だ。毎年やってくるのに、いつも噛みつかんばかりに吠えまくる。犬は匂いで人を記憶するのではなかったか。いい加減に覚えるよと、棒さされて鼻面を叩くが、一步も引く気配はない。さすが勇猛で知られるワ族に「ルワ(野蛮なワ族への蔑称)」と呼ばれるほどの犬である。

私の専門は言語学。中国雲南省西南部、メコン川以西に分布する「ワ」と総称される人々の言語を調査している。私のホストファミリーは急激に流入した漢族を嫌い、街外れに居を移した。ルワは漢族除けであるという。なるほど、日本人(ワ語で「水辺の漢族」と表現)にも遠慮がないわけだ。

フィールド言語学

言語学とは、言語の様々な側面を解明しようとする学問である。言語資料さえあれば、どこでも様々に構想をめぐらすことができる。しかし、肝心の資料に乏しい言語を対象とする場合、フィールドワークによる資料収集が不可欠となる。このような

フィールドワークを主たる手法とする言語学を「フィールド言語学」と呼ぶ。

私はフィールド言語学には、二つの活躍の場があると考えている。一つは、言語そのものの構造解明である。もう一つは、言語を通してその話者集団の文化のありようを解明することである。両者は別次元の問題のようにみえるが、複雑に絡み合う部分も少なくない。話し手の生活・文化空間に入り込むフィールド言語学は、言語と言語外現実の切り離しがたい関係を認識することのできる、またとない現場でもある。

言語研究とテキスト

未知の言語の調査は、通常、基礎語彙を集めることから始まる。単語の比較をとおして、音の種類や配列などを解明していくのである。音の仕組みがだいたい分かると、さらに大きな単位である句や文へと関心を向ける。多くの場合、事前準備した項目に対し、媒介言語から対象言語へと翻訳するかたちで調査をすすめていく。しかし、この調査方法はやがて行き詰ることになる。調査者の主観で選択された項目ばかりでは、「木を見て森を見ない」議論に陥りかねないからだ。このようなインタビュー調査の限界を克服するために、テキストの収集が不可欠となる。

ところで、フィールド言語学で求める「テキスト」とは、単に文以上の言語的まとまりを指すわけではない。会話資料はもちろん、神話や民話、詩歌やなぞなぞなどの口承文芸、さらには調理法や思い出話まで、当該民族の言語によって記録されたものの全般をテキストと呼ぶ。これらはもちろん言語構造の解明だけに資するわけではない。当該民族集団の精神世界や価値観を知り得る貴重な資料でもある。

自然発話テキストを「採る」

テキスト収集は重要な作業項目であるが、その取り掛かりはなかなか難しい。初



パイプタバコをくわえ、たき火を囲む女性たち。正月の一風景。

めでの調査地では、調査許可も兼ねて、まずはコミュニティにおける名士や文化人と呼ばれる人びとを訪問することにしている。しかし、話題は往々にしてどこかで読んだような歴史講釈ばかり。「昔話を」と願い出ても、酒で話を濁されるのが関の山。どうやらこの地区で「文化的」とは漢文化に馴染むことを指すらしい。ワ語で語れる人はめっきり少なくなっている。

人伝を頼り、ようやく語りのできるという古老にたどりつく。しかし会話もそこそこ、物語など始める気配は全くない。ことばは言葉。やはり門外不出なのか。勝手にそう納得しかけたところ、家人が夜にまた来いという。やむなく村内をぶらつき、鶏や豚を追い、トウモロコシの皮むきを手伝いながら、日が暮れるのを待つ。日が暮れば、真っ暗な山道を帰ることは難しい。暗澹たる気持ちになりかけた頃、炉端に村人が一人二人と集まってくる。一言二言。そして沈黙の時間。やがてパイプをくゆらせながら、古老がぼつりぼつりと語り始める。「今日は遠くから兄弟が訪ねてきてくれた。俺はうれしい。まだ俺も小さかった頃のことだ。年寄りがよく話してくれたんだが……。」夕闇に囲炉裏火。そしてタバコ。私の調査地ではこうした「雰囲気」が物語の重要な一部分のようである。近年、山の村にも衛星TVが入り、大音量で音楽を流す若者が増えた。語り部のみならず、語りの雰囲気も得難くなりつつある。

書きことばのテキストを「採る」

テキスト収集は、話しことばに限るわけではない。条件さえ許せば、書きことばも貴重な収集対象となる。中国では、建国後、文字をもたない少数民族に対し、表記法を制定するという言語政策がとられた。ワ族も例外でなく、ローマ字による正書法（ワ文字）が考案されている。しかし残念なことに、漢字が圧倒的価値をもつ現状において、ワ文字を使うメリットは大きくない。それゆえにか、学ぶ機会さえほとんどない状況にある。何とかこの文字を生かす方法はないだろうか。

私にとって幸運だったのは、ホストファミリーの遠縁に、英語を学ぶ青年がいたことである。英語を学ぶのであれば、ローマ字に対する精神的障壁は薄いはず。早速、過去に記録されたテキストを教科書に、私はワ語の、彼はワ文字の相互学習を始めた。選定したテキストは、誤字脱字はおろか、「脱語脱文」までも多く含む、通読に堪えないものであった。読解作業は苦痛で



万物創造の主を祀る聖林。無数の水牛頭が供えられている。伝統的信仰の一端を垣間見ることができる。



市の立つ日にだけ現れる歯医者。調査協力者でもある友人を治療中。この後、症状がさらに悪化し、調査続行が困難になった。

現地初等教育機関に寄贈した民話集。ローマ字式正書法に中国語訳を付した。

あったが、ずいぶん鍛えられたように思う。彼も自らのことばで、日記や思い出話を書き残せるほどになった。今では、自然発話テキストの文字起こしにおいても掛け替えのないパートナーである。

研究成果を還元する

蓄積されたテキストは、何らかのかたちで公開することが望ましい。多分野の研究者が使えるように情報資源化することも大切な作業である。しかしながら、成果を研究のためだけにとどめれば、「研究者のエゴ」のそしりを免れまい。少なくとも、他人の生活空間に入り、人びとから言語的知識を得ることで成立するフィールド言語学においては、現地社会への「還元」という社会的責務を負うはずである。2007年、私は現地機関からの要請を受け、ワ文字に中国語訳を添えた民話集を公刊し、現地の

初等教育機関に寄贈することにした。寄贈自体は大変喜ばれたが、漢文化を学ぶことに重点が置かれ、ワ文字を学ぶ課程もない中で、どのように利用されるのだろうか。徒勞に終わるのではないかという不安は尽きない。それでも、自己紹介を兼ねてテキストを朗読すると、教室に笑いと歓声が沸き起こった。朗読の拙さがウケたのかもしれないが、私はこれに少し光明を見たような気がした。

かたちだけ還元して、それで事足りりもまた「研究者のエゴ」であろう。採ったテキストをどのように生かすかは、きわめて難しい問題である。世界の諸言語で様々な試みがおこなわれているが、これが正解といえる方法はあるまい。まずはコミュニティとよく意思の疎通をはかること、そして、必要に応じた協力ができるよう、常日頃から体制を整えておくことが重要である。